

学習者のストラテジーから見る自律性の考察

——研究ノート——

今井光子

要 約

言語習得を試みる者にとって、学習ストラテジーを理解し、自律的に学習していくことは、成功する為の最も重要な鍵の一つである。本稿では、言語習得における自律性とはどういうことか、学習者は如何にして自律的学習者になるのかという点に焦点を置き、現ELFプログラム受講生のストラテジーと自律性を考察した。また、今後のストラテジーと自律性の関係に対する研究に結びつく手がかりを探った。今回の考察により、特に初級クラスの学生は、豊富な教材へのアクセスが可能であっても、ストラテジーの知識が欠如していることにより、自律的学習者へと成長することは難しいということが明らかとなった。自律性というのは、教室内でのコントロールやストラテジーの指導によって助長されるべきである。

キーワード：自律性、言語学習ストラテジー、自主学習

はじめに

Brown (2002) によると、言語習得に成功する人というのは、自分の能力、キャパシティをよく理解しており、自分で定めた目標に向かって教室内外で計画的に努力していくことができる人である。つまり、学生が授業において、与えられた課題のみをこなし、具体的な自己目標を持っていなかったなら、その学生は、言語習得に成功するとは言い難い。言語習得とは、個人のモチベーションや能力に依存する部分が大きいということは否定ができないと言える。では、英語プログラムとして学生を「言語習得に成功する人」へと育て上げる為に、何ができるのかという課題が持ち上がる。「教室内外で計画的に努力する」には、その学生が、学習方法を理解し、自律的に学習することである。本稿では、現ELF受講生の学習ストラテジーと自律性の実態を観察し、今後プログラムとして解決すべき課題点を探る。

言語教育における「自律の概念」の背景

言語教育において、初めに“Autonomy（自律性）”という概念が生まれたのは、1960年代のヨーロッパであるとされている（Gremmo and Riley, 1995）。その時代の政治的混乱への反動による理想や期待といったものが、学習における理想の形の必要性を生み出した。1971年に開始したthe Council of Europe’s Modern Languages Projectにより、言語教育の場で最初に自律性の概念が用いられるようになった。そのプロジェクトの成果の一つが、フランスのNancy大学における*Centre de Recherches et d’Applications en Langues*（CRAPEL）と名付けられた学習者の自律を促進する為の施設である。第二言語学習の為の豊富な教材へのアクセスが可能であれば、学習者の学習者自身の指揮による学習を促進できるという考えの基に開始したセンターであった。当初、セルフアクセスというのは、自律学習を促進する手段の内の一つであると考えられていたが、Benson（2001）によると、近年では、セルフアクセスの言語学習が、自律学習と同義語のように用いられるようになってきた。1980年代に、言語学習における自律性は、その定義において様々な見解が出された。Holec（1985）は「学習者の能力（キャパシティ）」とする考えを主張し続け、他の研究者らは「学習者が教室外で自分の指揮により学習する状況」を指すと定義付けた。80年代後半に入ると、自律性に対する捉え方も一つの方角へ向かっていく。その中でも大きな影響を与えた研究の一つが、自律性のモデルは、教室内でのカリキュラム交渉を基礎とすべきというものであった。最近の研究では、更に教師自身の自律性により、如何にカリキュラムベースの自律性促進教育が可能であるかという方角へ進んでいる。自律性というのは、学習者自身に全ての責任があるのではなく、教室内でのコントロール、交渉、指導といったものが必要である。つまり、自律性が自主的に芽生えるものではないということが、今では多くの研究者に共通した考え方である。

調査目的

2013年度前期に筆者が担当していたELF/EFL（以下ELF）のクラスでは、教室外学習の記録（Study Log）を毎週提出するよう学生に指示していたが、その記録によると、ELFで求められている週8時間の教室外学修時間に達している学生はいなかった。これは、前述した自律性における定義の変移にもある通り、学習者の自律学習というのは、教室内でのコントロールからこそ生まれるもので、学習者に責任を負わせて育つものではないということを顕著に表す結果となった。その結果を受け、後期に入り、学生の授業外学習を促進する為の試みを開始した。授業の為の宿題とは別の課題を用意し、自学学習用にそのプリントを希望する者は申し出るようにという指示を出した。この教材は、自主的に英語力を向上させるためのもので、ELFの成績とは関係がないということも十分に説明をした。これにより、1) 教材の提示があれば、宿題でなくとも自律的に学習するか、2) その教材を利用し、どのような学習方法を使うか、

という点について考察することが目的であった。考察は、後期開始と同時の9月中旬から12月末の期間に行われた。

調査方法

現ELFプログラムを受講している学生の内、筆者が後期に担当した初級(ELF 102)2クラス、中級(EFL 202)1クラスの合計3クラスを対象に調査を行った。学生は、最初の2週間、授業時に例として説明を受けたストラテジーに従って、自主学习教材プリントをこなすよう指示された。モデルとして提示したストラテジーは、Reading教材・Listening教材とも2つずつであった。Readingの教材に対しては、まず分からない単語を書き出し、意味を調べる。そして、よく読みMain Ideaをノートに書き出すというものであった。Listeningの教材に関しては、初めに渡してある単語リストをよく勉強した上で、何度も聞き、聞き取った内容を日本語または英語で書き出すというものであった。その後、3週目の授業時に、ストラテジーに対する指示文を読ませた。指示文書の目的は、前述した学習方法以外にも、工夫して学習することを促す為のものであり、今までに行ったことのある学習法や、聞いたことがあるけれど行ったことがないもの、などを取り入れるようにという提案をした。また、学生に学習方法に対する意識を向けさせる為、その週に使用したストラテジーと、なぜそれを行ったのかという理由を日本語でコメントさせた。課題を行ったノートは、火曜日と金曜日¹⁾の授業後に筆者が確認し、簡単に一对一のフィードバックを行った。

課題内容と分量は、次の通りであった。週2回の授業毎に、火曜日にはA4、1ページ程度のReading(様々な英語教材より)が4枚、金曜日にはA4、1ページ程度のReadingが2枚と、Listening用単語シートが配られ、ブラックボードに載せられたその週のListening(BBC Learning Englishより)を聞くよう指示された。課題は、授業後に教卓前に並べておき、学生が自由に持って行けるようになっていた。

考察には、1) 学生が学習を行ったノート、2) Blackboardのトラッキングシステム(Listening課題のみ) 3) 学生アンケートの3つが使われた。

調査結果

当初は、全てのクラスの学生が課題を行いたいとの希望を出したが、初級2クラスの学生は、2週目から誰も課題のプリントを取りに来なくなった。一方、中級クラスの学生は、18名中9名が1か月以上継続し、その後徐々に減少し、12月末の調査終了まで持続したのは、1名であった(表1)。継続を中止した理由に関しては、後述の学生アンケート結果の中で考察する。

表1 中級クラス課題継続人数 (N=18)

週数	継続中止人数	週数	継続中止人数
1週目	0	7週目	1
2週目	4	8週目	1
3週目	3	9週目	2
4週目	2	10週目	1
5週目	0	11週目	0
6週目	3	12週目	1

学生が課題を行ったノートを考察すると、学生が使用するストラテジーに顕著な特徴が見られた。まず、Reading教材に関しては、例として1, 2週目に統一して行わせた、分からない単語を抜き出して調べる、Main Ideaを書き出すという2つの方法から脱する学生は一人もいなかった。それ以外に追加したストラテジーとしては、音読を行ったと書いている学生が数名見られた。これは、筆者が工夫して様々な学習方法を試すよう促した際、音読を一つの例として挙げた為だと思われる。また、1名の学生が、前期から引き続き授業中に行っているNote-takingのスキルを使って、読んだ内容を纏めるというストラテジーを使用していた。しかし、その他には、授業時に行ったアクティビティを自律的に自主課題に活かす学生はいなかった。Listeningの教材に関しては、少し学生によって違いが見られた。ある学生は、聞き取った内容を全て日本語で書き起こすという方法で学習した。その他、聞き取った単語やフレーズをランダムにメモしている学生、単語のみ調べてある学生がいた。さらに、Reading, Listening両方において、Oxford (1990) の提唱するDirect Strategiesに焦点を置く学生が多かったが、2名の学生のコメントには、「単語を覚えるのは大変だが、繰り返すことが重要なので頑張っている」や、「Listeningは難しいが、何度も聞いていけば慣れるので頑張っている」という自らを励ますIndirect Strategyを使っている例もあった。興味深いことに、これを書いていた学生は2名とも男子学生であり、多くの研究者 (Redfield *et al.*, 2001, Goh&Foong, 1997, Kato, 2005) が提唱している性差—女性の方がより多くのストラテジーを使う傾向にある—という説とは逆行する結果であった。

Blackboardでのトラッキング考察

学生のListeningファイルへのアクセスは、決まって授業日の前に集中していた。Listeningの課題自体をこなした学生は合計5名であったが、アクセス履歴を残した学生の合計は10名おり、Readingよりも難しいと感じて諦めた学生が多かった (学生フィードバックより)。Listeningを自発的に努力して行った5人は、モチベーションが高いとも言えるが、95%が授業日前日 (月曜日) の夜にアクセスしていることを考えると、教員による自主学習の進行状況チェックがなければ、行わなかったことを意味しているとも考えられる。自律学習の理想とし

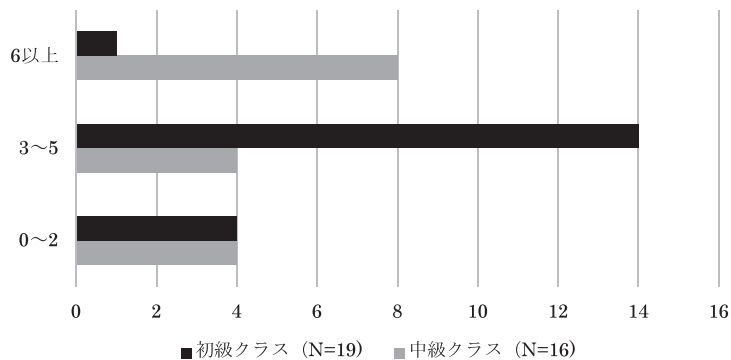
では、成績や他人への印象に関係なく、自分の為に学習を行っていくということが本来の形であるのだろうが、学生にとっては自主課題であっても担当教員がチェックをするという意識の方が高いということを示しているのかもしれない。これは、学生が自主課題を行ってこなかったことを報告する際に、“Sorry”という言葉が発することからも窺える。

学生アンケートによる考察

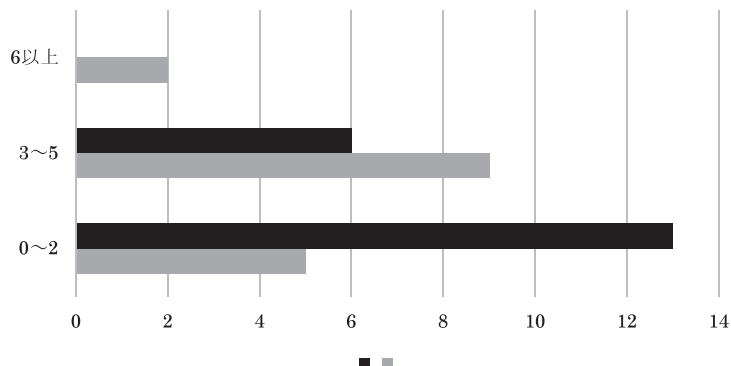
後期学期中に3クラスを対象に、知識として知っている英語学習方法にはどのようなものがあるかを探る目的の学生アンケートを行った。Holec (1981) が述べているように、学習者が自律性を持ち合わせているかどうかと、それを実践として利用するかどうかは同じではない。自律性のある学習者であっても、何らかの理由により自律的学習を行わないということもある。つまり、初級クラスの学生の中には、語学の勉強以外では、自律性を持ち合わせているが、英

表2 知っているストラテジーと使用したストラテジー

知識として持っているストラテジー数



学期中使用したストラテジー数



語においては自律学習ができていないという可能性もある。今回の学生アンケートにより見えてきたことは、初級の学生に限っては、学習ストラテジー自体の知識に欠けるので、自律学習を行わなかったというより、行えなかったとも考えられるのではないかという点である。アンケートに挙げられたストラテジーのリストは、初級クラスと中級クラスとに大きな差が見られた。初級クラスでは、21%の学生が、0～2の種類の方法を書いた。また、大多数の73%が3～5、6つ以上書いた学生は1名だけであった。一方、中級クラスは、0～2しか挙げなかった学生が25%、3～5が25%、そして半数の50%が6つ以上リストアップしていた。また、リストに挙げたものの中で実際に今学期中に行ったものにチェックをさせると、初級クラスで0～2だった学生は13名、3～5が6名であった。中級クラスは、0～2が5名、3～5が9名、6以上が2名であった。中級クラスの学生は、自主課題に関してはあまり多くのストラテジーを使っていなかったが、英語学習全般では、初級クラスよりも多くのストラテジーを使っていたことが分かった(表2)。

同アンケート中に、自主的に学習を行わなかった・途中で止めてしまったことの原因を聞く質問があった。初級クラスでは、2名の学生が「何をしたら良いのか分からなかった」とコメントし、4名が「忙しかった」とコメントした。中級クラスでは1名が「何をすべきか分からない」と答え、6名が「他の課題やバイトが忙しかった」とコメントした。

結論と今後の研究展開

今回の考察により、学習する教材へのアクセスを可能にしても、初級クラスの学生は、自主的に学習を進めることができないということが分かった。中級クラスの学生は、ある程度自主的に行う学生もいたが、多くは途中から自主学習を断念してしまうという結果であった。初級クラスが自主学習を行わなかった理由は、学生アンケートでのフィードバックからも分かるように、何をすれば良いのか分からないという、ストラテジー知識の欠如が明らかとなった。さらに今回のストラテジー考察により、課題を続けた中級クラスの学生においても、教材を利用する際に、最初に設けられたストラテジーから抜け出すことができないということが浮き彫りになった。本調査では、Readingの教材とListeningの教材だけに絞って課されたという点では、少しストラテジーの選択肢が狭まるとはいえ、単語を調べる、Main Ideaを書く以外にも多くのストラテジーが存在する。しかし、学生はストラテジーということに意識をして学習した経験がないので、別のストラテジーに変えて学習するという方向へ自主的にはいかないようである。これは、「言われたことをする」学習体制しか経験していないということとも取れる。中級クラスにおいては、努力をしようという意識が初級クラスに比べて見られたのは、彼らの方がストラテジーに対する知識と意識が少し高く、それにより自律性のレベルが少し高くなったと言える。ストラテジーの知識に関して、興味深いことは、前期に、Note-takingの仕方、Main IdeaとSupporting Detailの取り方を十分に学習したにも拘らず、そのストラテジーを自

主課題に応用しようという試みが見られなかったという点である。Note-takingの方法を授業で行い、宿題としてNote-takingをしてもらうようにという指示を出されれば、それを行うが、そのスキルを身に付けても、自主学習に役に立たせることに意識を向けないという実態があるようだ。このことから、直接的に授業中に行ったストラテジーを使うよう指導をしてこそ、自律学習へ結びつくと言える。

初級・中級の言語学習者は、教材を与える、または宿題・課題を出すということにより、自律的な学習が促進される可能性はとても低い。そうすると、英語プログラムとして今後、こういった学生に対して求められることは、自律性の指導とストラテジーの指導である。学習者は意識して自律的になるべきであり、意識してストラテジーを変えていく必要がある。それは、教室内の指導なしでは育たないものである。今後の展望としては、学習者がより自律的になる為の、自律性スケール表の作成が一つ考えられる。スケール表に基づいて、自分が今どの程度自律的に進められる学習者であるのかという意識をはっきり持たせることが可能になるのではないか。また、ストラテジーの指導を行った際には、教室外の学習で継続するよう直接的指導が必要である。

注

- 1) 後述の調査結果にある通り、初級クラスは課題を続けた学生が0人であった為、結果的に中級クラスの火曜日と金曜日というスケジュールになった。

参考文献

- Benson, P. (2001). *Teaching and Researching Autonomy in Language Learning*. Pearson Education.
- Brown, H. D. (2002). *Strategies for Success*. Addison Wesley Longman.
- Goh, C. C. M., & Foong, K. P. (1997). Chinese ESL students' learning strategies: A look at frequency, proficiency, and gender. *Hong Kong Journal of Applied Linguistic*, 2 (1), 39-53.
- Gremmo, M. J. and Riley, P. (1995). Autonomy, self-direction and self-access in language teaching and learning: the history of an idea. *System*, 23 (2): 151-164.
- Holec, H. (1981). *Autonomy in Foreign Language Learning*. Oxford: Pergamon.
- Holec, H. (1985). On autonomy: some elementary concepts. In P. Riley (ed.). *Discourse and Learning*. London: Longman, 173-90.
- Kato, S (2005) How language learning strategies affect English proficiency in Japanese university students. *Journal of the Faculty of Human Studies Bunkyo Gakuin University*, 7 (1), 239-262.
- Oxford, R. (1990). *Language Learning Strategies – What every teacher should know*, Newbury House.
- Redfield, M., Bundy, D., & Nuefer, R. (2001). Are there gender differences in English proficiency: Looking at non English majors. *Osaka Keidai Ronsho*, 52 (2), 215-223.

(いまい みつこ)

Research Note: An Analysis of Autonomy in Language Learning Strategies

Mitsuko IMAI

Abstract

To understand language learning strategies and be autonomous are two of the most important keys for a successful language learner. This report investigates the relationship between language learning strategies and autonomy for further implementation by focusing on the question about what autonomy in language learning is and how can a learner be autonomous. The current ELF program students were offered materials to study autonomously and their behaviors were analyzed. The results show that beginner level students are not autonomous because they have little knowledge about strategies. Autonomy should be facilitated by teaching learning strategies in the classroom.

Keywords: Autonomy, language learning strategies, self-study